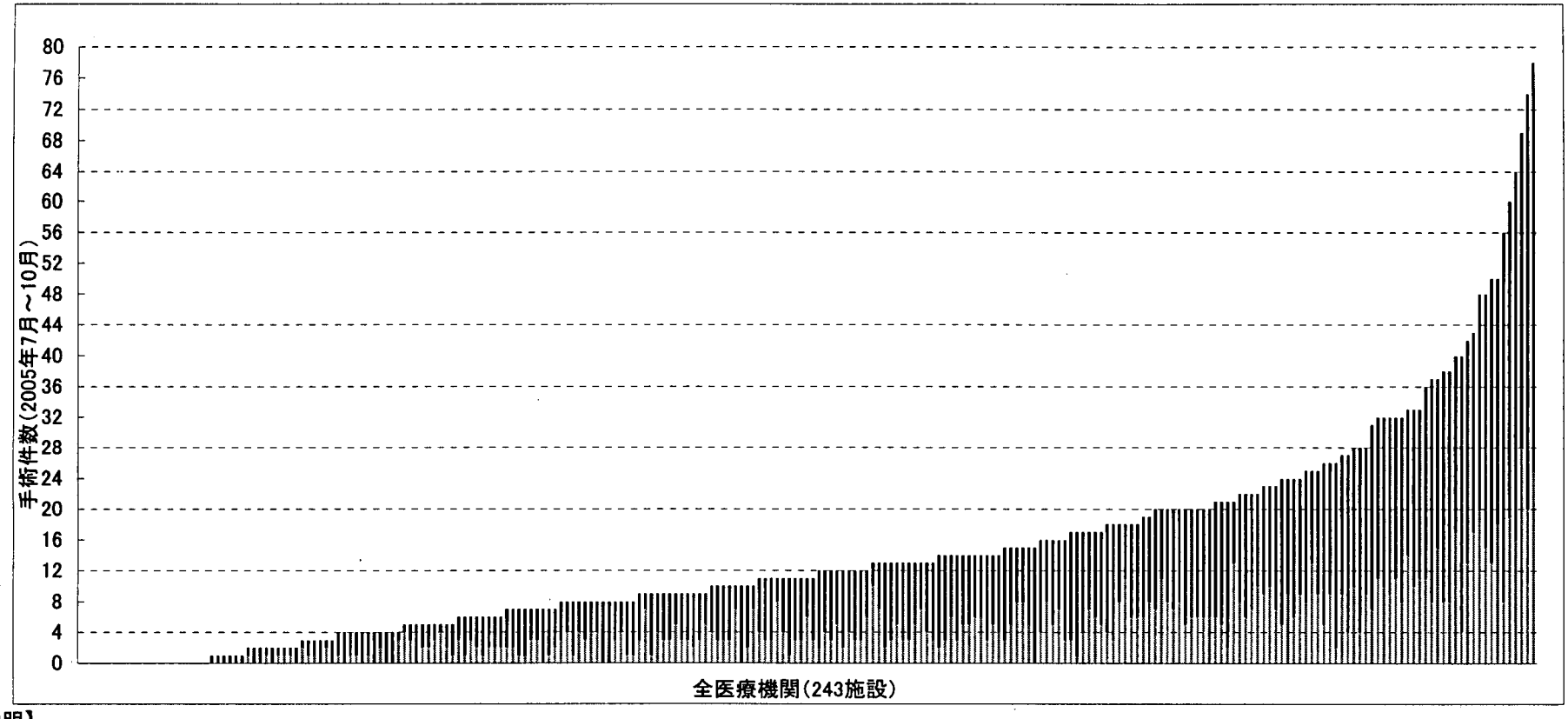
MDC16
外傷・熱傷・中毒、異物、その他の疾患

股関節大腿近位骨折(全部位)における手術施行件数

解析対象DPC番号の範囲	1608003						パーセンタイル						
分類名	解析内容	手術件数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
股関節大腿近位骨折	骨折観血的手術　件数	2,416	9.9	9.8	0	54	0	1	3	8	13	23	29
	人工骨頭挿入術　施行件数	1,117	4.6	4.6	0	28	0	0	1	3	7	10	13



【図の説明】

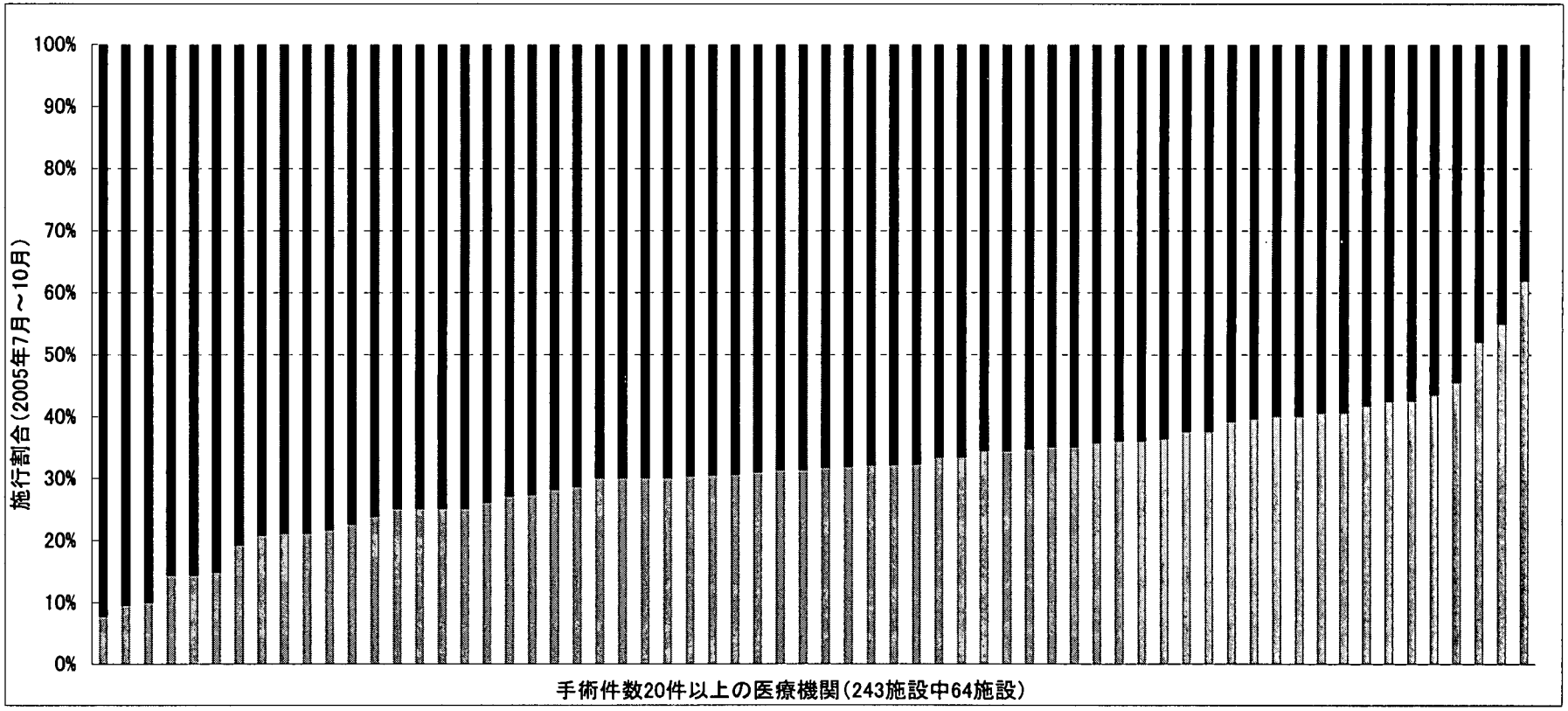
:人工骨頭挿入術[DPC手術コード:01]　　:骨折観血的手術[DPC手術コード:02、K0461]

【コメント】

全体の9割に当たる221施設において、大腿骨近位骨折(全部位:頚部、転子部、骨幹部を含む)症例に対する手術治療が行われていた。手術治療を要する症例は4か月間で平均15例ほどであるが、中には70件を超えていた施設もあった。術式のうち、観血的手術は全体の68%を占めていた。

股関節大腿近位骨折(全部位)における手術施行割合(N = 2,066)

解析対象DPC番号の範囲	1608003					パーセンタイル						
分類名	解析内容	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
股関節大腿近位骨折	骨折観血的手術　施行割合	69%	10%	38%	92%	55%	58%	63%	69%	75%	80%	86%
	人工骨頭置換術　施行割合	31%	10%	8%	62%	14%	20%	25%	31%	37%	42%	45%



【図の説明】

手術件数上位25%の施設を解析対象(手術件数:20件以上)とした。

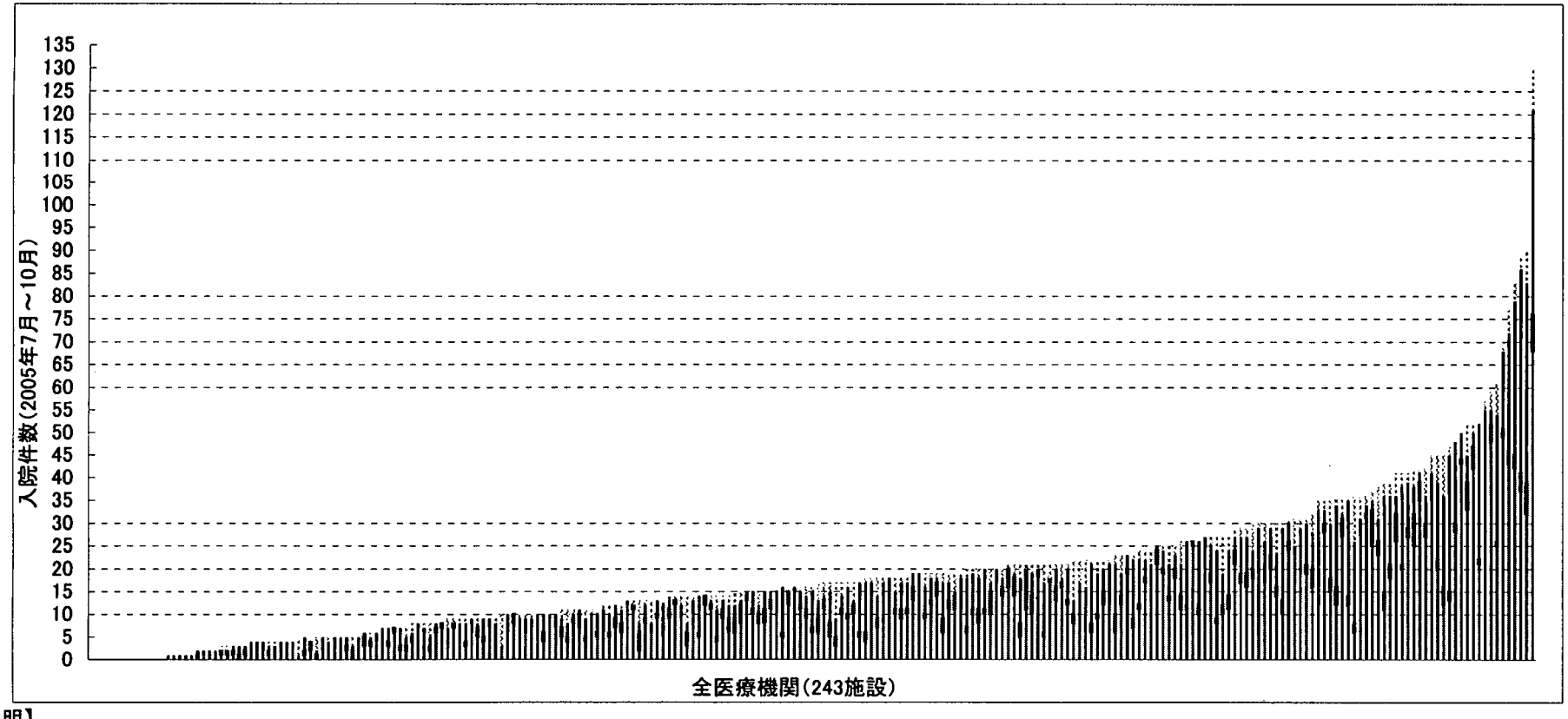
:人工骨頭挿入術[DPC手術コード:01]　　:骨折観血的手術[DPC手術コード:02、K0461]

【コメント】

4か月間の手術件数が20件以上であった64施設を解析対象とした。大腿骨近位骨折(全部位:頚部、転子部、骨幹部を含む)における術式を「人工骨頭挿入術」と「骨折観血的(整復内固定)手術」の二つに分類したところ、全体的には、関節外骨折に対する手術である骨折観血的手術が70%を占めていた。術式の内訳は施設間で大きなバラツキがあり、観血的(整復内固定)手術の割合はおよそ40%から90%まで分布していた。

股関節大腿近位骨折(全部位)における年齢・部位別入院件数

解析対象DPC番号の範囲	1608003						パーセンタイル						
分類名	解析内容	入院件数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
股関節大腿近位骨折	その他骨折64歳以下 件数	433	1.8	2.1	0	10	0	0	0	1	3	5	6
	その他骨折65歳以上 件数	1,369	5.6	7.8	0	45	0	0	1	3	7	14	21
	頸部骨折64歳以下 件数	360	1.5	1.6	0	9	0	0	0	1	2	3	4
	頸部骨折65歳以上 件数	2,598	10.7	10.1	0	68	0	1	4	9	14	23	28



【図の説明】

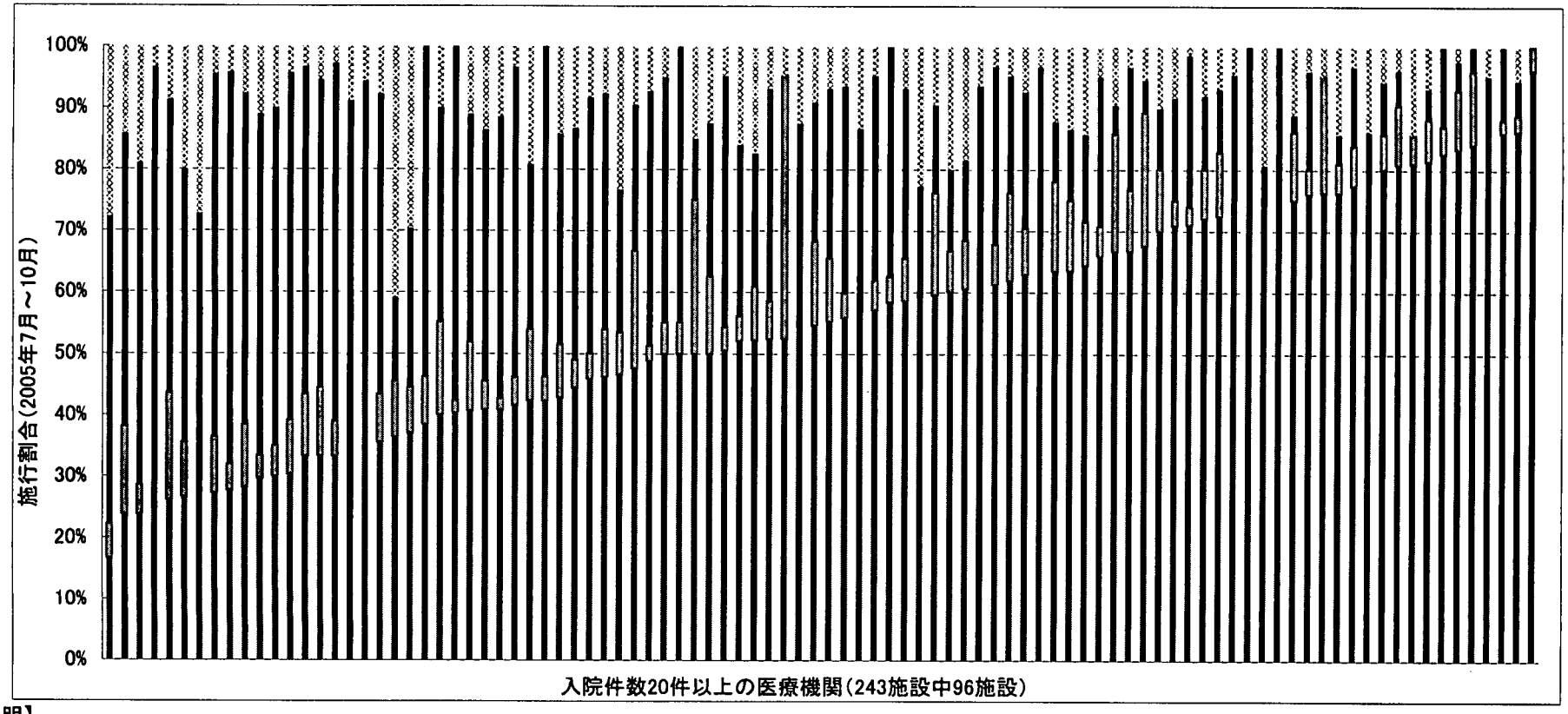
:頸部骨折65歳以上[ICD-10:S720]
:その他骨折65歳以上[ICD-10:S721, S722, S727. S728, S730]
:頸部骨折64歳以下[ICD-10:S720]
:その他骨折64歳以下[ICD-10:S721, S722, S727. S728, S730]

【コメント】

243施設中230施設(94%)において大腿骨近位骨折(全部位:頸部、転子部、骨幹部を含む)1件以上の症例があった。65歳以上の頸部骨折の症例が全体の55%を占めていた。その他部位における骨折の入院件数は平均値では約7件であるものの、最大で54件の施設があり、その分布にバラツキがみられた。

股関節大腿近位骨折(全部位)における年齢・部位別入院割合(N = 3,325)

解析対象DPC番号の範囲	1608003					パーセンタイル						
分類名	解析内容	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
股関節大腿近位骨折	その他骨折64歳以下 割合	9%	7%	0%	41%	0%	0%	4%	7%	13%	19%	23%
	その他骨折65歳以上 割合	29%	19%	0%	72%	4%	5%	13%	26%	45%	54%	58%
	頸部骨折64歳以下 割合	7%	6%	0%	43%	0%	0%	4%	6%	10%	14%	19%
	頸部骨折65歳以上 割合	55%	19%	17%	96%	27%	29%	41%	55%	71%	80%	84%



【図の説明】

入院件数20件以上の施設を解析対象とした。

:頸部骨折65歳以上[ICD-10:S720]

:その他骨折65歳以上[ICD-10:S721, S722, S727. S728, S730]

:頸部骨折64歳以下[ICD-10:S720]

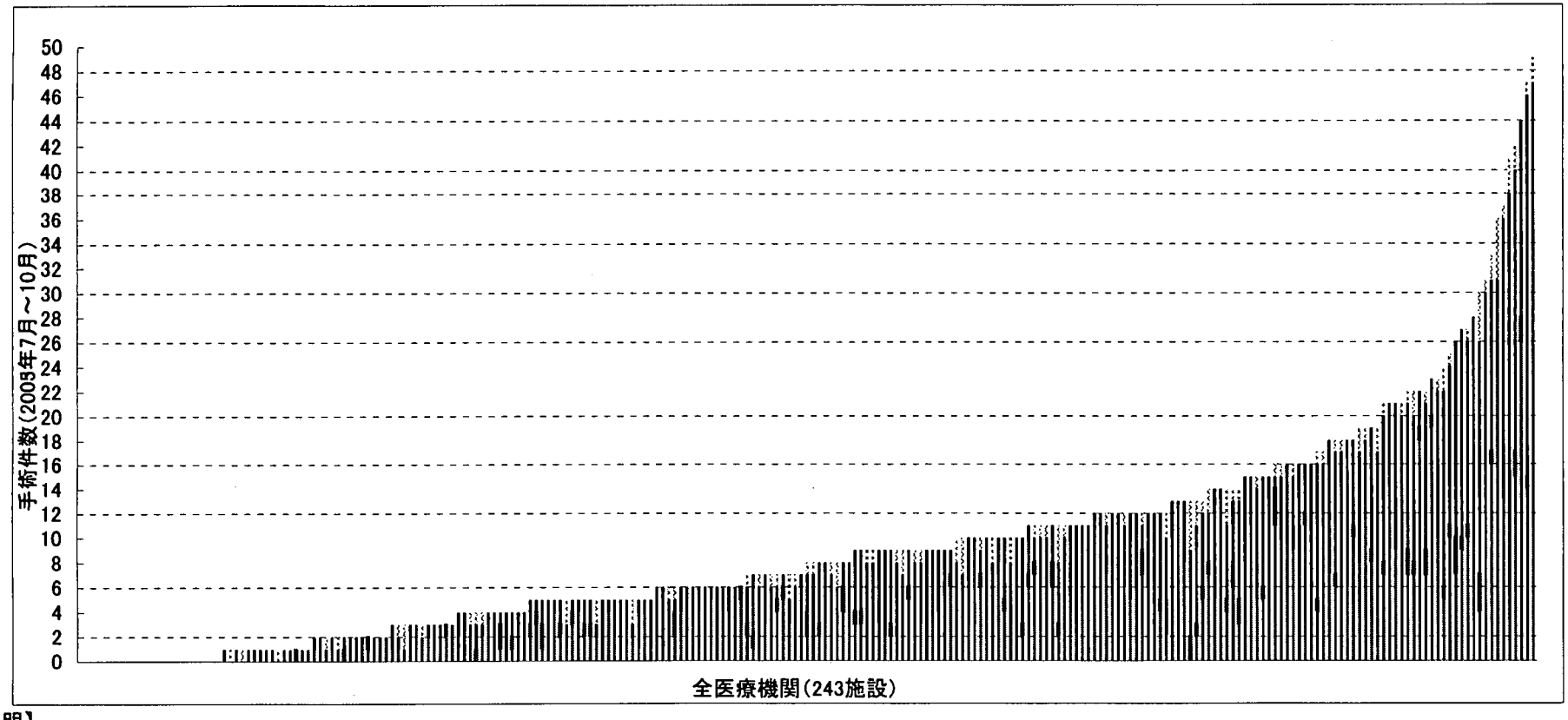
:その他骨折64歳以下[ICD-10:S721, S722, S727. S728, S730]

【コメント】

4ヶ月間の大腿近位骨折(全部位:頚部、転子部、骨幹部を含む)の入院件数が20件以上であった96施設を解析対象とした。65歳以上では、頸部骨折がその他部位の骨折よりもおよそ2倍近くの割合を占めるものの、64歳以下では頸部とその他の部位とでは大きな差はなかった。

股関節大腿近位骨折(頸部のみ)における年齢・術式別手術施行件数

解析対象DPC番号の範囲	1608003						パーセンタイル						
分類名	解析内容	手術件数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
股関節大腿近位骨折	骨折観血的手術64歳以下 件数	120	0.5	0.8	0	5	0	0	0	0	1	2	2
	骨折観血的手術65歳以上 件数	1,089	4.5	5.2	0	31	0	0	1	3	6	11	15
	人工骨頭挿入術64歳以下 件数	87	0.4	0.6	0	3	0	0	0	0	1	1	2
	人工骨頭挿入術65歳以上 件数	1,019	4.2	4.4	0	26	0	0	1	3	6	10	13



【図の説明】

頸部骨折を対象:ICD-10:S720

:人工骨頭挿入術65歳以上[DPC手術コード:01]

:骨折観血的手術65歳以上[DPC手術コード:02かつKコード:K0461]

:人工骨頭挿入術64歳以下[DPC手術コード:01]

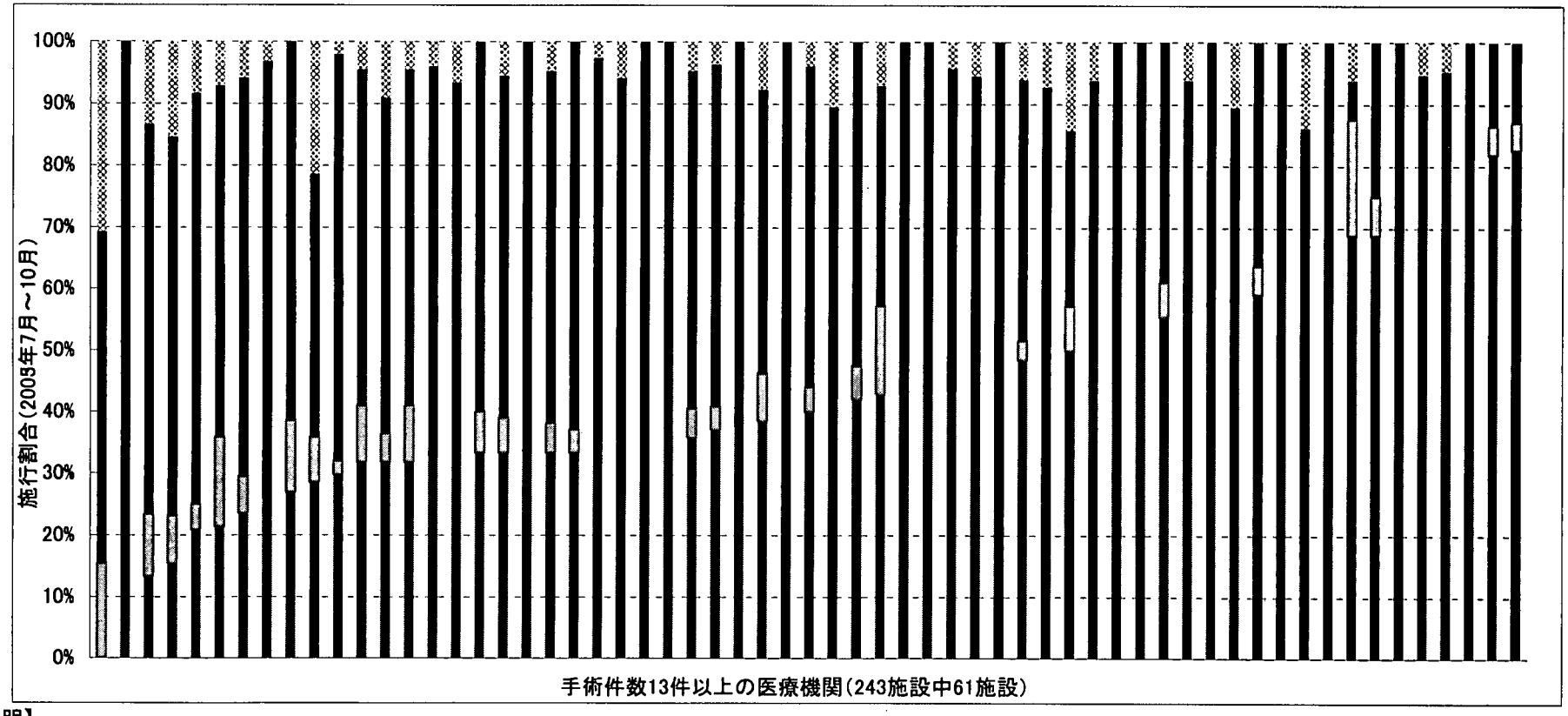
:骨折観血的手術64歳以下[DPC手術コード:02かつKコード:K0461]

【コメント】

243施設中219施設(90%)においていずれかの手術が施行された。人工骨頭挿入術と骨折観血的手術の施行件数に大差はなく、65歳以上においても同様であった。特に、65歳以上の骨折観血的手術の施行件数の分布はバラツキが大きかった(平均値:4.5、最小値:0件、最大値:31件)。

股関節大腿近位骨折(頸部のみ)における年齢・術式別手術施行割合(N = 1,314)

解析対象DPC番号の範囲	1608003					パーセンタイル						
分類名	解析内容	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
股関節大腿近位骨折	骨折観血的手術64歳以下 割合	5%	6%	0%	31%	0%	0%	0%	4%	6%	11%	14%
	骨折観血的手術65歳以上 割合	48%	17%	6%	92%	14%	22%	38%	54%	61%	64%	67%
	人工骨頭挿入術64歳以下 割合	4%	5%	0%	19%	0%	0%	0%	0%	6%	9%	14%
	人工骨頭挿入術65歳以上 割合	43%	19%	0%	83%	15%	24%	33%	40%	56%	69%	81%



【図の説明】

手術件数上位25%の施設を解析対象(手術件数:13件以上)とした。ICD-10:S720

:人工骨頭挿入術65歳以上[DPC手術コード:01]

:骨折観血的手術65歳以上[DPC手術コード:02かつKコード:K0461]

:人工骨頭挿入術64歳以下[DPC手術コード:01]

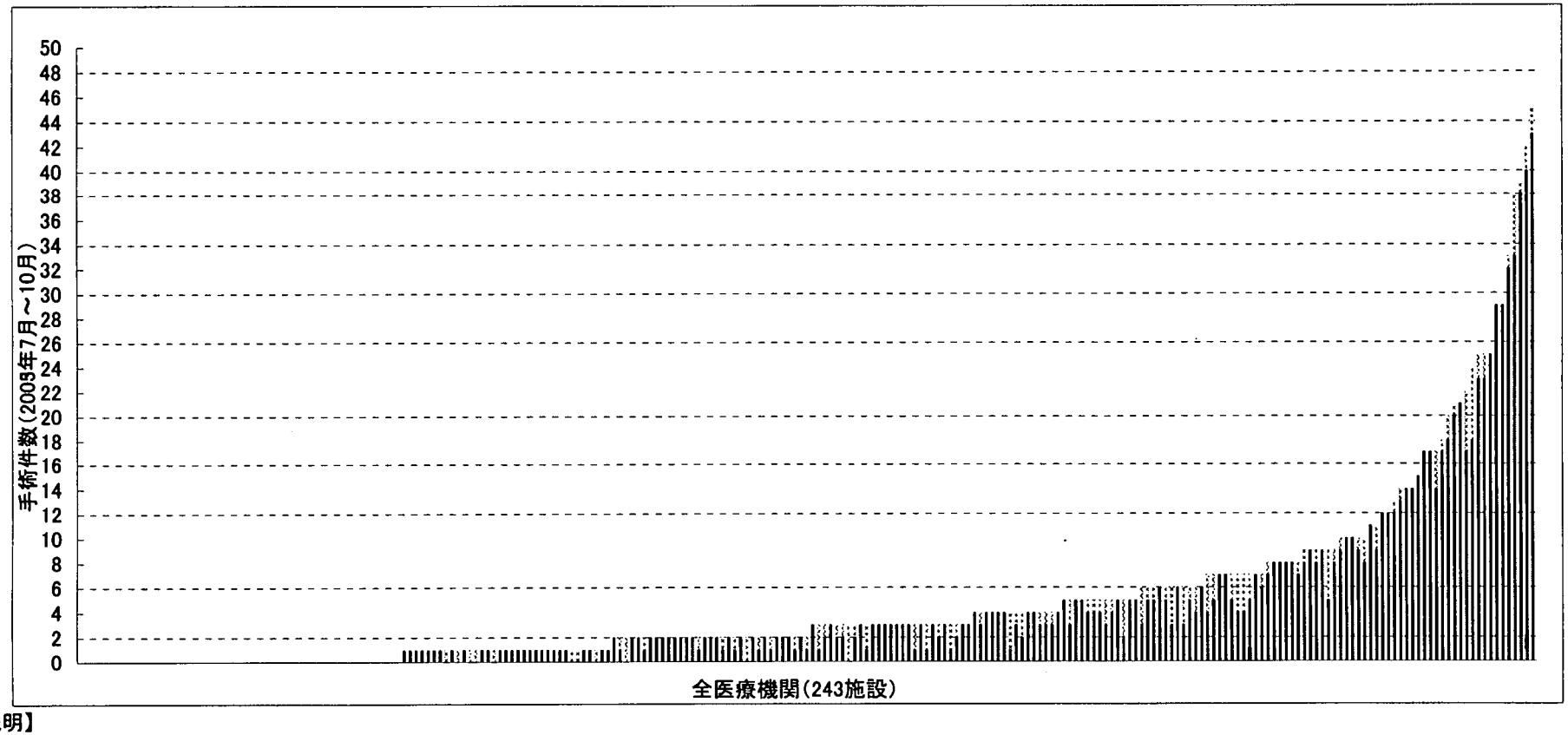
:骨折観血的手術64歳以下[DPC手術コード:02かつKコード:K0461]

【コメント】

4ヶ月間の手術件数が上位25%に相当する13件以上であった61施設を解析対象とした。人工骨頭挿入術と骨折観血的手術の施行割合に大差はなく、65歳以上では、両術式ともにおよそ0%から90%の施行割合に分布しており、術式の選択に極めて大きなバラツキがみられた。また、年齢の分布は各施設において大差はみられなかった。

股関節大腿近位骨折(その他部位)における年齢・術式別手術施行件数

解析対象DPC番号の範囲	1608003						パーセンタイル						
分類名	解析内容	手術件数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
股関節大腿近位骨折	骨折観血的手術64歳以下 件数	142	0.6	1.0	0	6	0	0	0	0	1	2	3
	骨折観血的手術65歳以上 件数	1,065	4.4	7.0	0	43	0	0	0	2	5	12	18
	人工骨頭挿入術64歳以下 件数	2	0.0	0.1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	人工骨頭挿入術65歳以上 件数	9	0.0	0.2	0	2	0	0	0	0	0	0	0



【図の説明】

その他骨折を対象:ICD-10:S721, S722, S727. S728, S730

:人工骨頭挿入術65歳以上[DPC手術コード:01]

:骨折観血的手術65歳以上[DPC手術コード:02かつKコード:K0461]

:人工骨頭挿入術64歳以下[DPC手術コード:01]

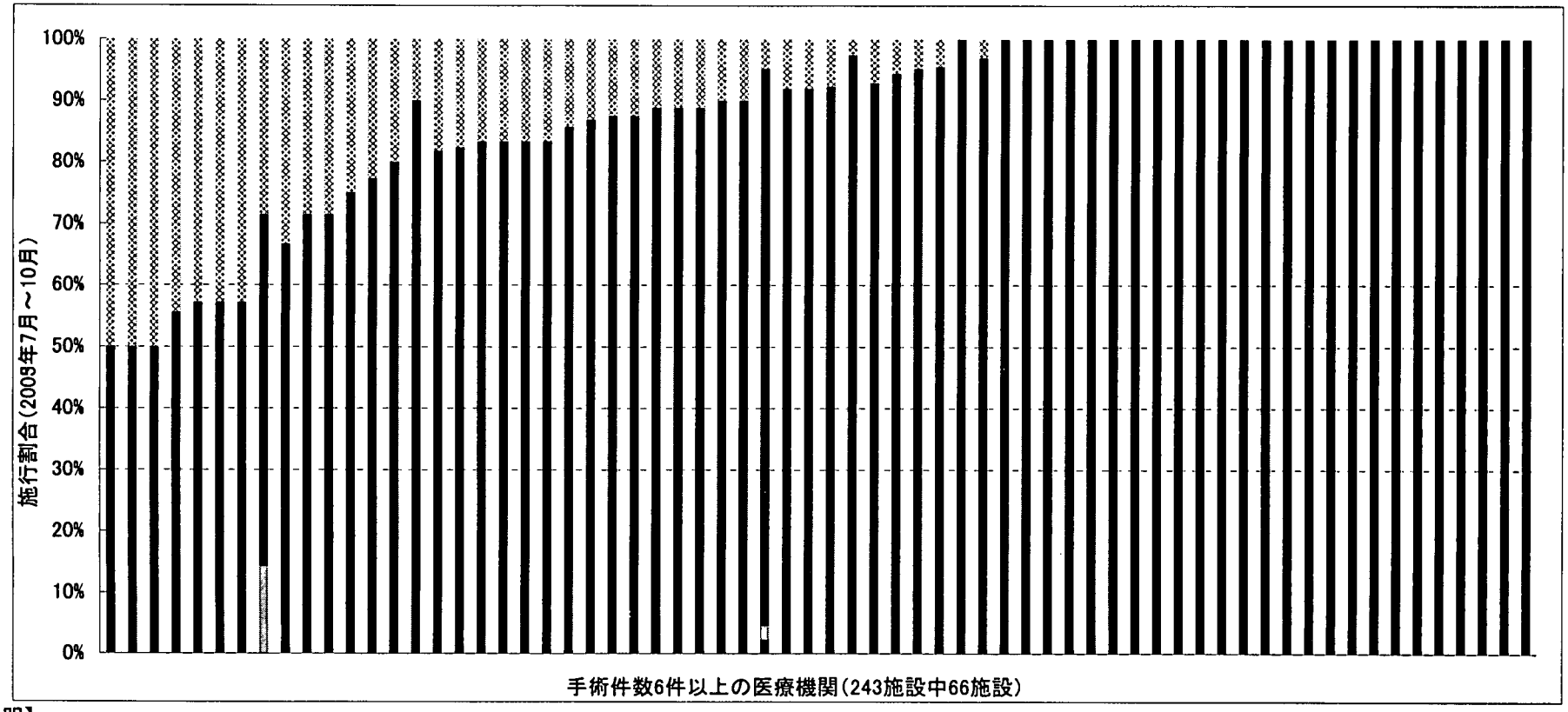
:骨折観血的手術64歳以下[DPC手術コード:02かつKコード:K0461]

【コメント】

243施設中189施設(77%)において1件以上の症例があった。その他の部位における骨折では、骨折観血的手術の施行件数は全体の99%を占めているが、8施設において11例のみの人工骨頭挿入術が施行されていた。骨折観血的手術の施行件数は平均5件であるものの、最大で45件が施行されるなど、施設間でのバラツキがみられた。

股関節大腿近位骨折(その他部位)における年齢・術式別手術施行割合(N = 911)

解析対象DPC番号の範囲	1608003					パーセンタイル						
分類名	解析内容	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
股関節大腿近位骨折	骨折観血的手術64歳以下 割合	12%	15%	0%	50%	0%	0%	0%	7%	17%	38%	44%
	骨折観血的手術65歳以上 割合	88%	15%	50%	100%	56%	57%	83%	92%	100%	100%	100%
	人工骨頭挿入術64歳以下 割合	0%	2%	0%	14%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	人工骨頭挿入術65歳以上 割合	0%	1%	0%	10%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%



【図の説明】

手術件数上位25%の施設を解析対象(手術件数:6件以上)とした。ICD-10:S721, S722, S727. S728, S730

:人工骨頭挿入術65歳以上[DPC手術コード:01]

:骨折観血的手術65歳以上[DPC手術コード:02かつKコード:K0461]

:人工骨頭挿入術64歳以下[DPC手術コード:01]

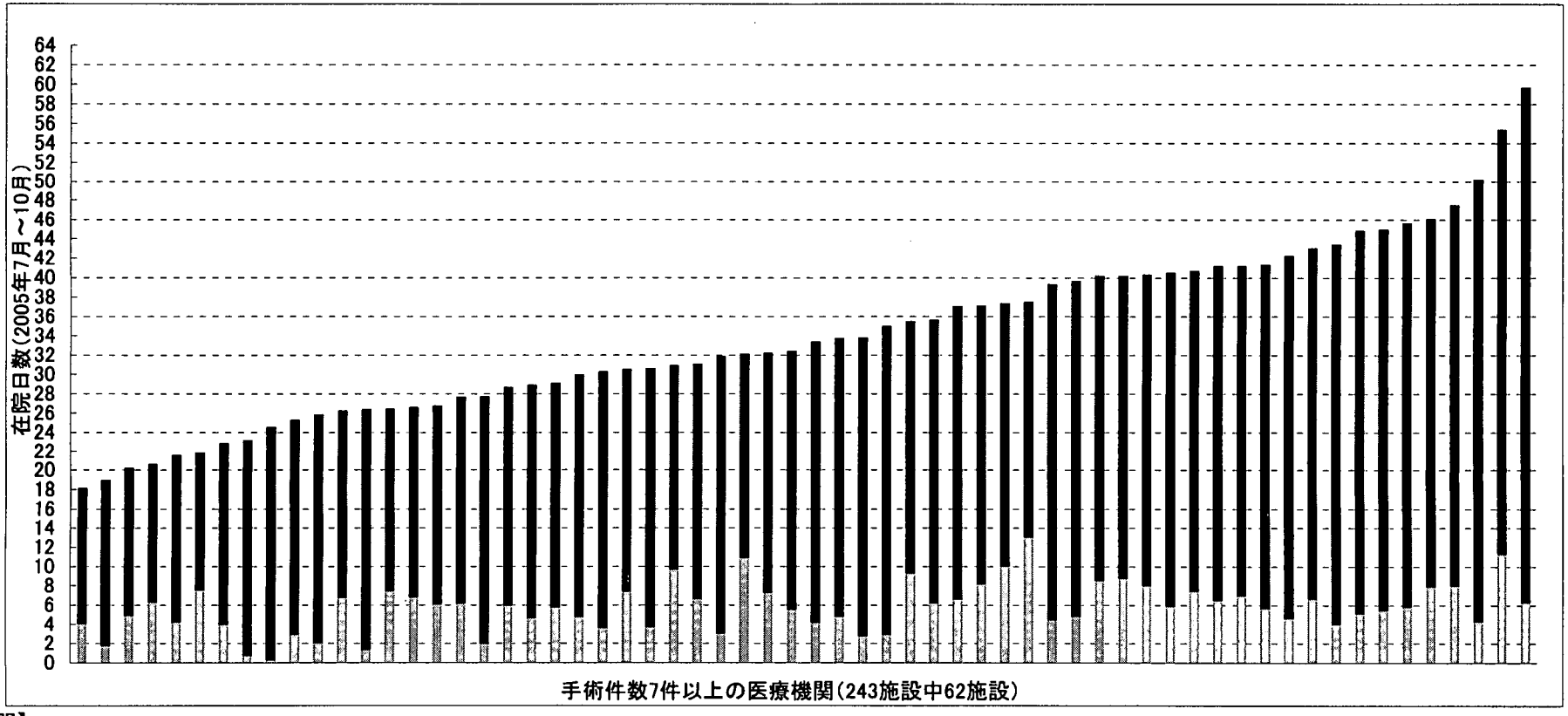
:骨折観血的手術64歳以下[DPC手術コード:02かつKコード:K0461]

【コメント】

4ヶ月間の手術件数が上位25%に相当する6件以上であった66施設を解析対象とした。その他の部位の骨折では骨折観血的手術が圧倒的に施行割合が高いものの、その年齢分布は非常にバラツキがみられた。また、5施設において、人工骨頭挿入術が施行されていた。

股関節大腿近位骨折(全部位)の人工骨頭挿入術施行症例における平均在院日数(N = 646)

解析対象DPC番号の範囲	1608003x01					パーセンタイル						
分類名	解析内容	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
股関節大腿近位骨折における人工骨頭挿入術施行症例	在院日数	34.1	9.0	18.2	59.7	20.7	22.9	27.0	32.9	40.5	45.0	47.5
	術後在院日数	28.4	8.3	14.1	53.4	15.4	19.0	22.6	27.0	34.6	39.6	39.9
	術前在院日数	5.7	2.6	0.2	13.0	1.7	2.7	4.1	5.8	7.3	8.7	10.0



【図の説明】

全症例の97.5%以上2.5%未満を除外し、手術件数上位25%の施設を解析対象(手術件数:7件以上)とした。

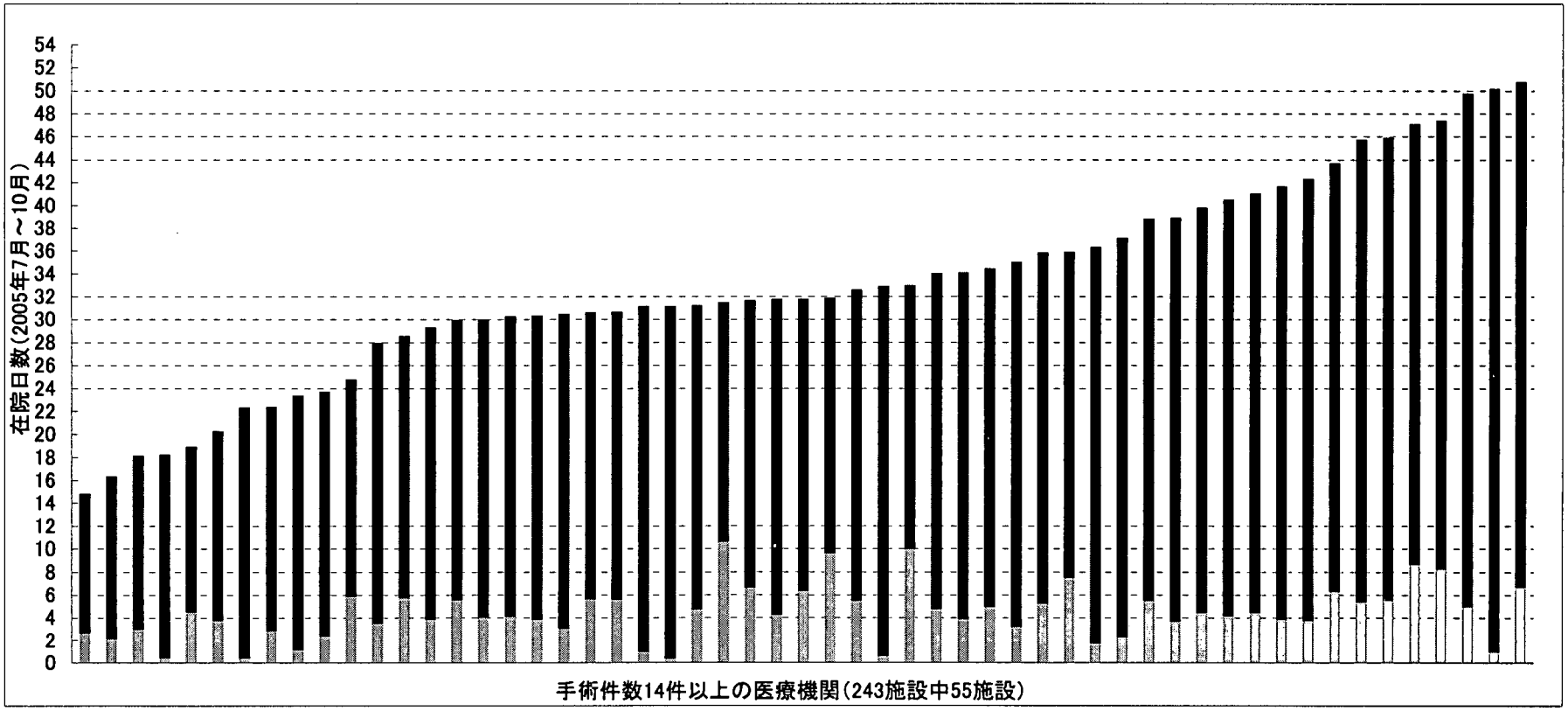
:術前在院日数　　:術後在院日数

【コメント】

全症例の97.5%以上と2.5%未満の症例を除外し、4か月間の大腿近位骨折(全部位:頚部、転子部、骨幹部を含む)の手術件数が7件以上であった62施設を解析対象とした。術前在院日数の中央値は約6日で最小約0.2日、最大約13日と分布の幅は比較的狭いものの、術後在院日数では中央値約27日、最小値約14日、最大約53日とたいへん大きなバラツキを示していた。また、外れ値下位2.5%未満に27件が相当したが、そのうち7件が1施設で占められていた。

股関節大腿近位骨折(全部位)の観血的手術施行症例における平均在院日数(N = 1,285)

解析対象DPC番号の範囲	1608003x02					パーセンタイル						
分類名	解析内容	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
股関節大腿近位骨折における骨折観血的手術施行症例	在院日数	33.1	8.8	14.9	50.8	18.2	21.1	29.6	31.8	38.9	45.9	48.1
	術後在院日数	28.7	8.3	12.2	49.3	14.9	18.3	22.9	27.4	35.1	38.9	41.5
	術前在院日数	4.4	2.4	0.4	10.6	0.5	1.0	3.0	4.2	5.5	7.1	8.9



【図の説明】

全症例の97.5%以上2.5%未満を除外し、手術件数上位25%の施設を解析対象(手術件数:14件以上)とした。

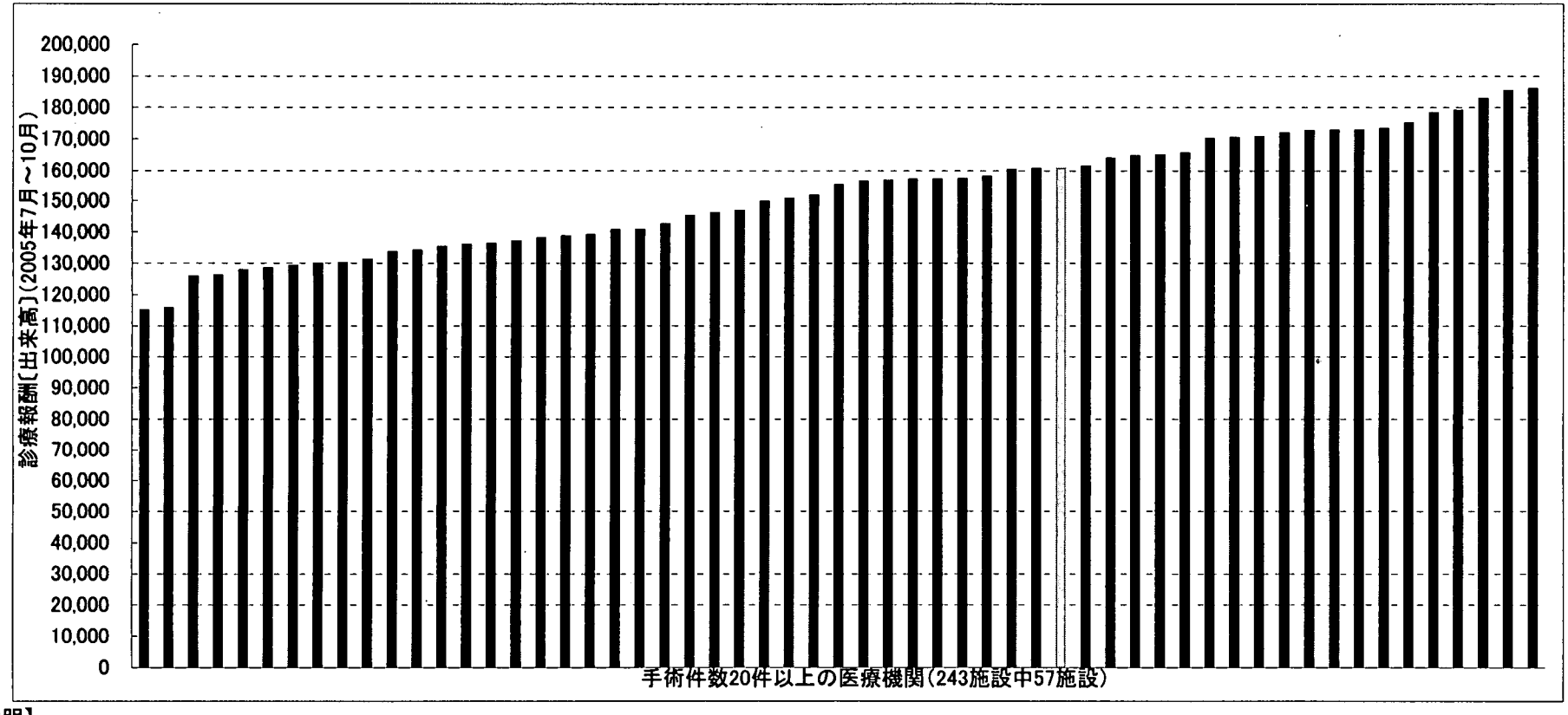
:術前在院日数　　:術後在院日数

【コメント】

全症例の97.5%以上と2.5%未満の症例を除外し、4か月間の大腿近位骨折(全部位:頚部、転子部、骨幹部を含む)の手術件数が14件以上であった55施設を解析対象とした。術前在院日数の中央値は約4日で最小0.4日、最大約11日と分布の幅は比較的狭いものの、術後在院日数では中央値約27日、最小値12日、最大約49日とたいへん大きなバラツキを示していた。また、外れ値下位2.5%未満に53件が相当したが、そのうち18件が1施設で占められていた。

股関節大腿近位骨折(全部位)手術症例における一入院当たり診療報酬〔出来高〕平均値(N = 1,850)

解析対象DPC番号の範囲	1608003					パーセンタイル						
分類名	解析内容	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
股関節大腿近位骨折症例	診療報酬〔出来高〕	152,292	18,524	115,266	186,247	126,294	129,119	136,609	155,664	165,846	174,276	180,035
	特定機能病院(1施設)〔出来高換算総点数〕	160,990	−	160,990	160,990	160,990	160,990	160,990	160,990	160,990	160,990	160,990
	その他の参加病院(56施設)〔出来高制度の総点数〕	152,137	18,654	115,266	186,247	126,282	129,055	136,552	153,867	166,985	174,460	180,226



【図の説明】

全症例の97.5%以上2.5%未満を除外し、手術件数上位25%の施設を解析対象(手術件数:20件以上)とした。単位は診療報酬点数である。

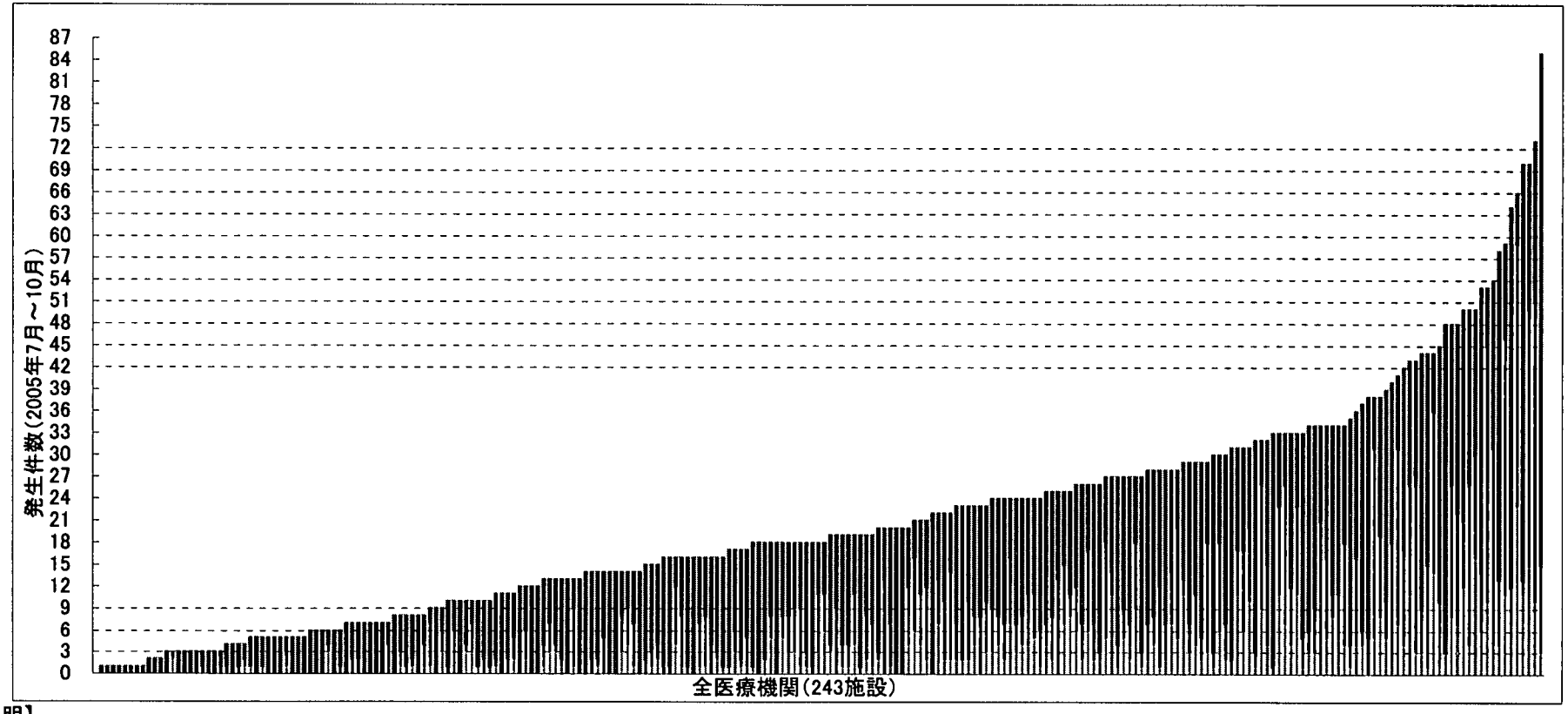
:特定機能病院　　:その他の参加病院

【コメント】

全症例の97.5%以上と2.5%未満の症例を除外し、4か月間の大腿近位骨折(全部位:頚部、転子部、骨幹部を含む)の手術件数が20件以上であった57施設を解析対象とした。全病院における診療報酬〔出来高〕の中央値は約15万点であったが、特定機能病院(1施設)の中央値はその他の参加病院よりも約0.8万点高額であった。

敗血症その他の感染症が最も医療資源を投入した傷病名である症例の年齢別発生件数

解析対象DPC番号の範囲	1601603						パーセンタイル						
分類名	解析内容	発生件数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
敗血症その他の感染症	敗血症その他の感染症の件数(全年齢)	5,129	21	15	0	85	3	4	10	18	29	41	50
	敗血症その他の感染症の件数(15歳以上)	3,195	13	10	0	70	2	3	6	12	17	24	29
	敗血症その他の感染症の件数(1～14歳)	1,284	5	7	0	41	0	0	0	3	7	13	18
	敗血症その他の感染症の件数(乳児)	650	3	4	0	23	0	0	0	1	4	7	11



【図の説明】

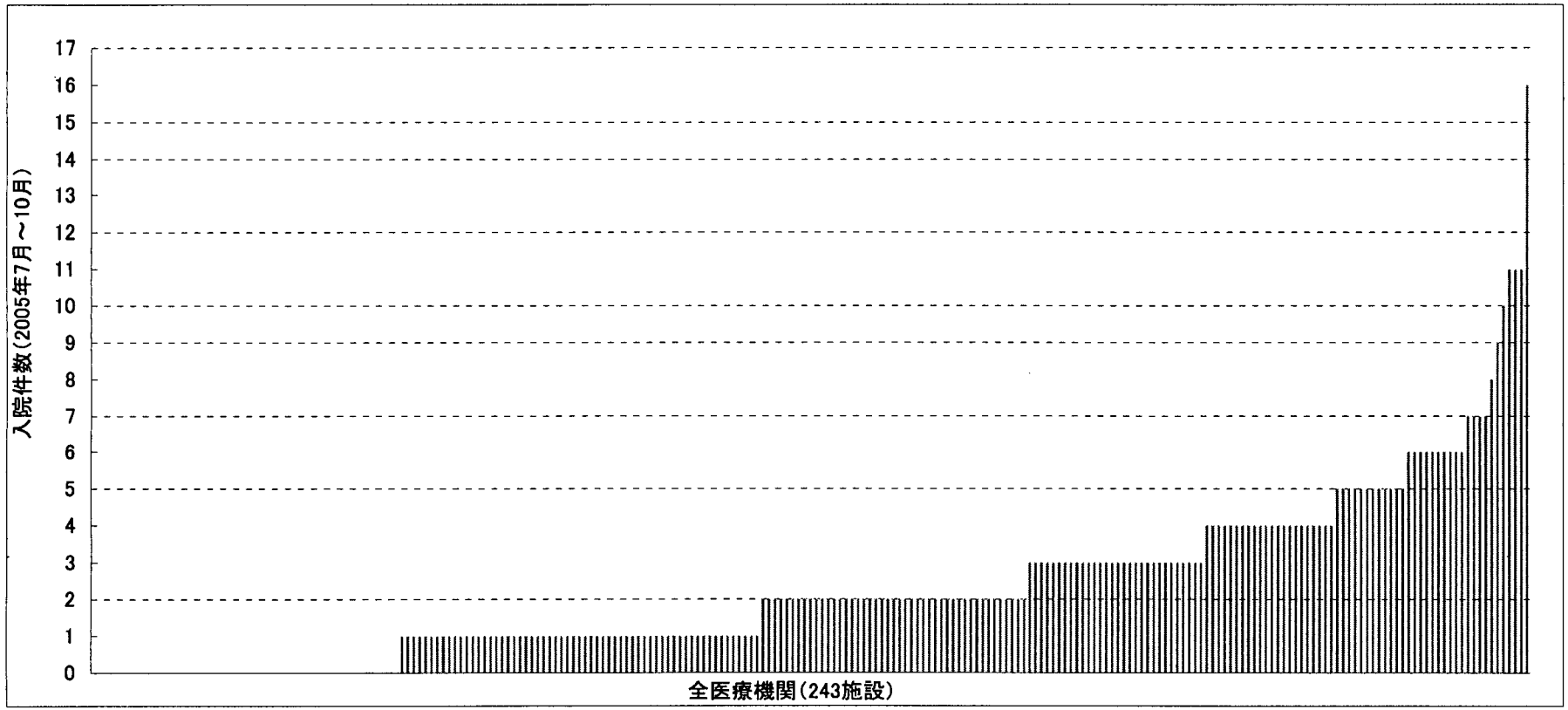
:敗血症その他の感染症の件数(乳児)　:敗血症その他の感染症の件数(1～14歳)　:敗血症その他の感染症の件数(15歳以上)

【コメント】

・敗血症その他の感染症の件数1件以上の医療機関は全施設(243施設)において見られた。
・敗血症その他の感染症の年齢別発生件数は、一般的に15歳以上の症例が最も多かったが、乳児および小児の敗血症の割合が高い医療機関も相当数存在した。
・入院後に、敗血症を合併した症例に関しては、横断的解析(図 MDC横断解析1～4)を参照。

骨盤骨折の入院件数

解析対象DPC番号の範囲	1609803						パーセンタイル						
分類名	解析内容	入院件数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
骨盤骨折	入院件数	553	2	2	0	16	0	0	1	2	3	5	6



【図の説明】

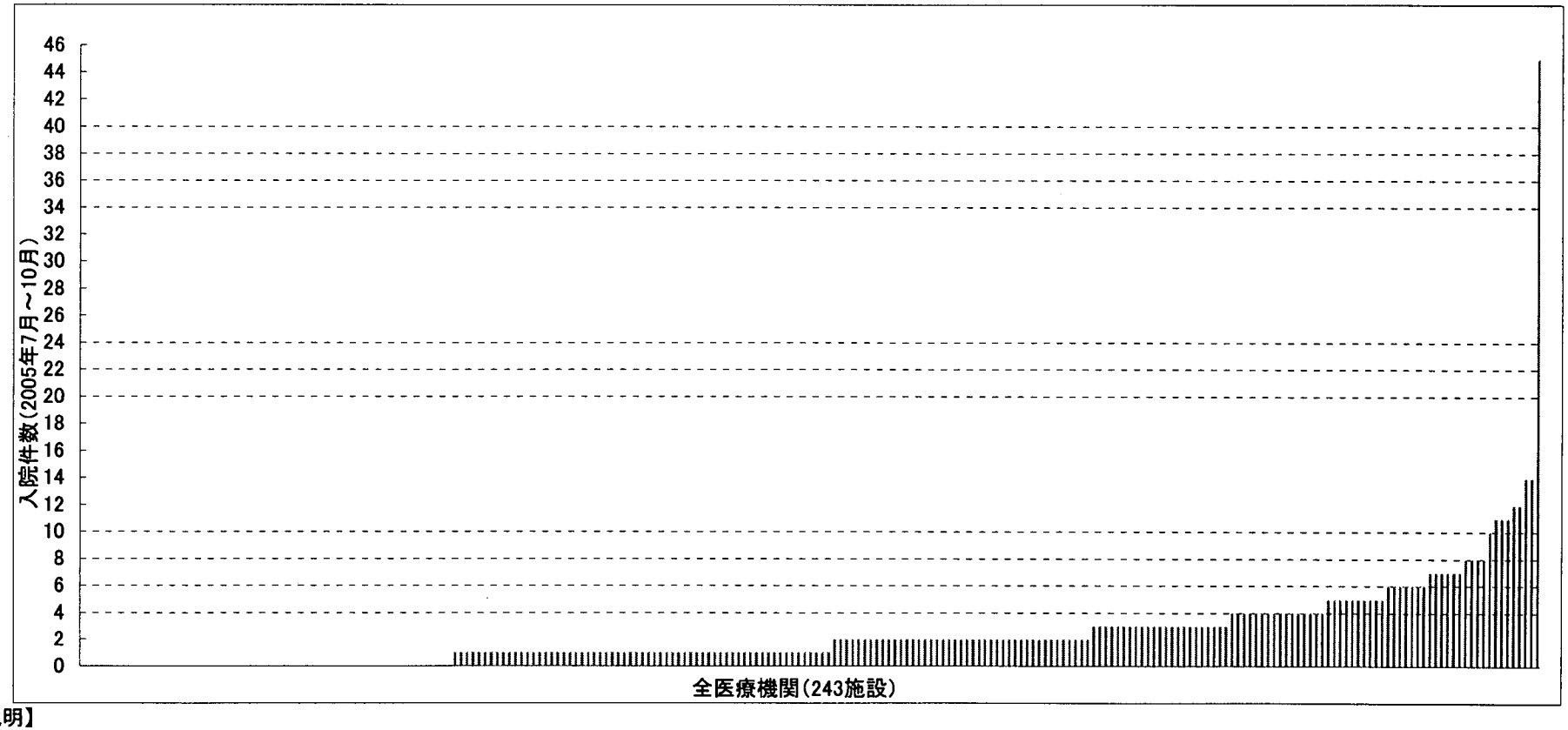
■:骨盤骨折の入院件数

【コメント】

・骨盤骨折の入院件数1件以上の医療機関は191施設(全体の78%)において1件以上の症例が見られた。
・骨盤骨折の入院件数には、医療機関でのバラツキが見られた。

多発外傷の入院件数

解析対象DPC番号の範囲	1609903						パーセンタイル						
分類名	解析内容	入院件数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
多発外傷	入院件数	588	2	4	0	45	0	0	0	1	3	6	8



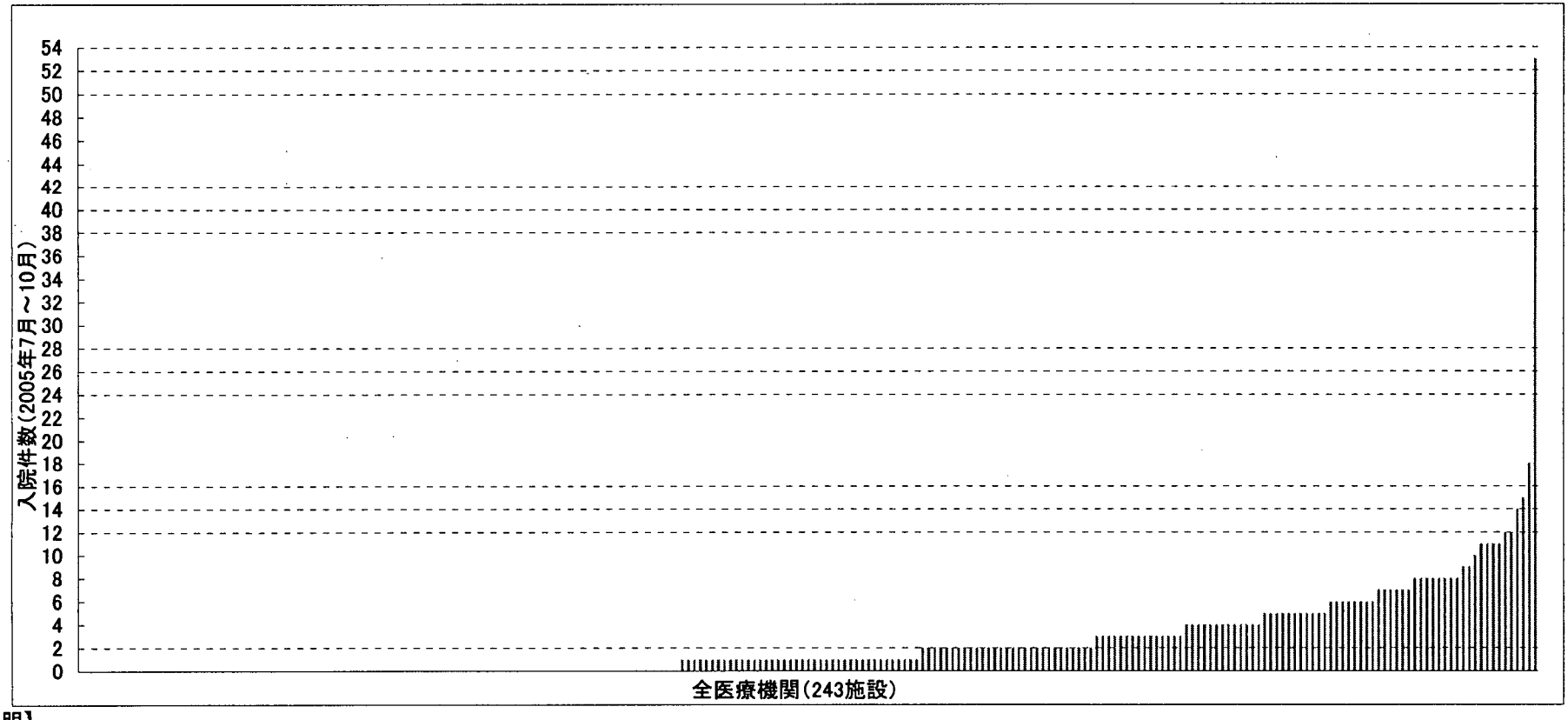
【図の説明】

【コメント】

・多発外傷の入院件数1件以上の医療機関は181施設(全体の74%)において見られた。
・多発外傷の入院件数では、医療機関でのバラツキ見られた。

熱傷・化学熱傷・凍傷・電撃症の入院件数

解析対象DPC番号の範囲	1610003						パーセンタイル						
分類名	解析内容	入院件数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	5	10	25	50	75	90	95
熱傷・化学熱傷・凍傷・電撃症	入院件数	600	2	5	0	53	0	0	0	1	3	7	9



【図の説明】

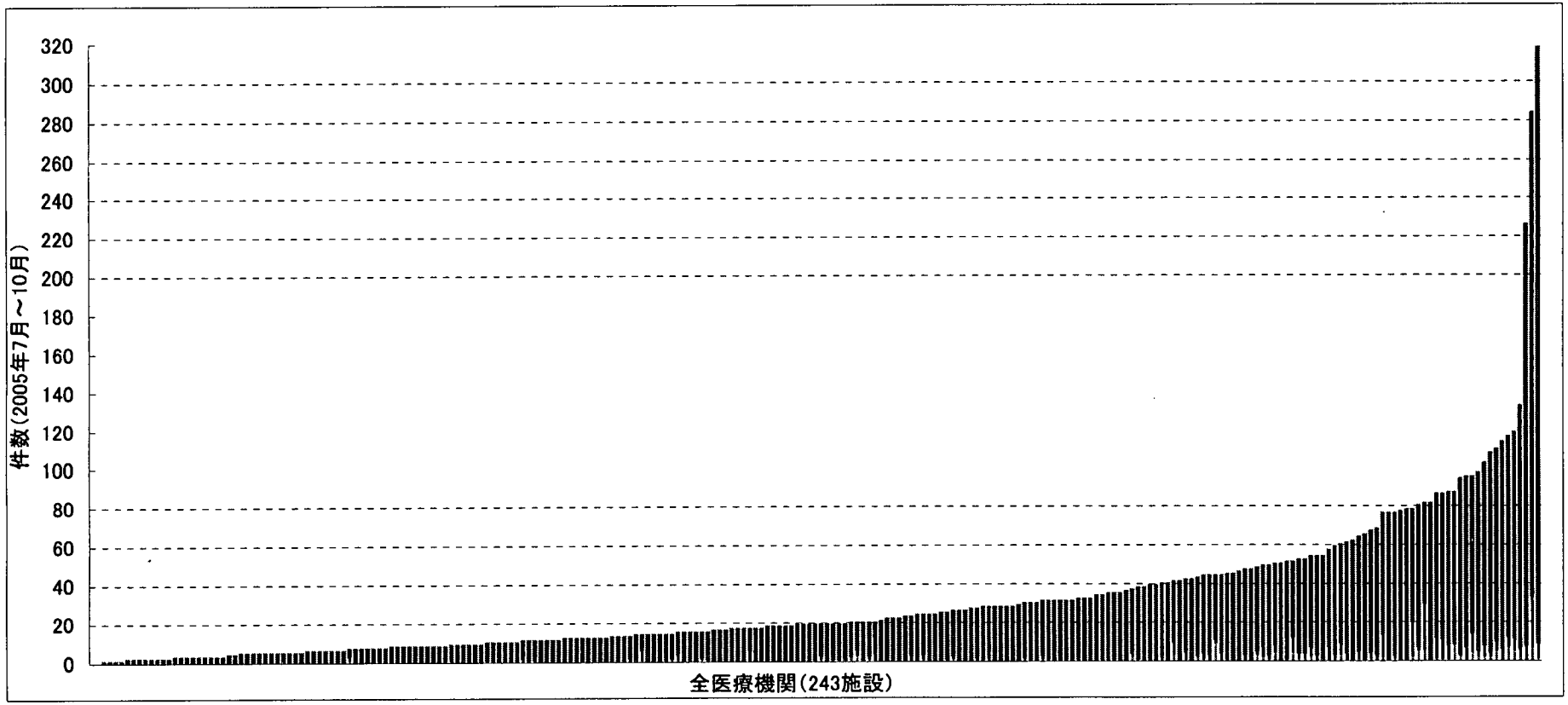
【コメント】

・熱傷・化学熱傷・凍傷・電撃症の入院件数1件以上の医療機関は143施設(全体の58%)において見られた。
・熱傷・化学熱傷・凍傷・電撃症の入院件数では、医療機関でのバラツキが見られた。

MDC横断解析

入院後に発症した敗血症の件数

分類名	対象	全症例数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	パーセンタイル 5	10	25	50	75	90	95
入院後に発症した敗血症	入院後に発症した敗血の症例数(全年齢)	7,625	31	39	0	317	2	4	9	19	41	76	95
	入院後に発症した敗血症の症例数(15歳以上)	7,136	29	36	0	308	2	4	8	18	39	65	87
	入院後に発症した敗血症の症例数(1～14歳)	353	1	3	0	26	0	0	0	0	2	4	7
	入院後に発症した敗血症の症例数(乳児)	136	1	1	0	9	0	0	0	0	1	2	3



【図の説明】

「入院後合併症」が『敗血症』(ICD10コード:A021/ A207/ A227/ A241/ A267/ A282/ A327/ A394/ A40$/ A41$/ A427/ A548/ B007/ B349/ B377/ D71/ I301/ I330/ I400/ I776/ J020/ J189/ J209/ J950/ L029/ L080/ M8699/ O080/ O753/ O85/ O883/ P369/ T814/ T880のいずれか)であり、かつ「入院時併存症」と「入院の契機となった傷病名」が『敗血症』でない症例数

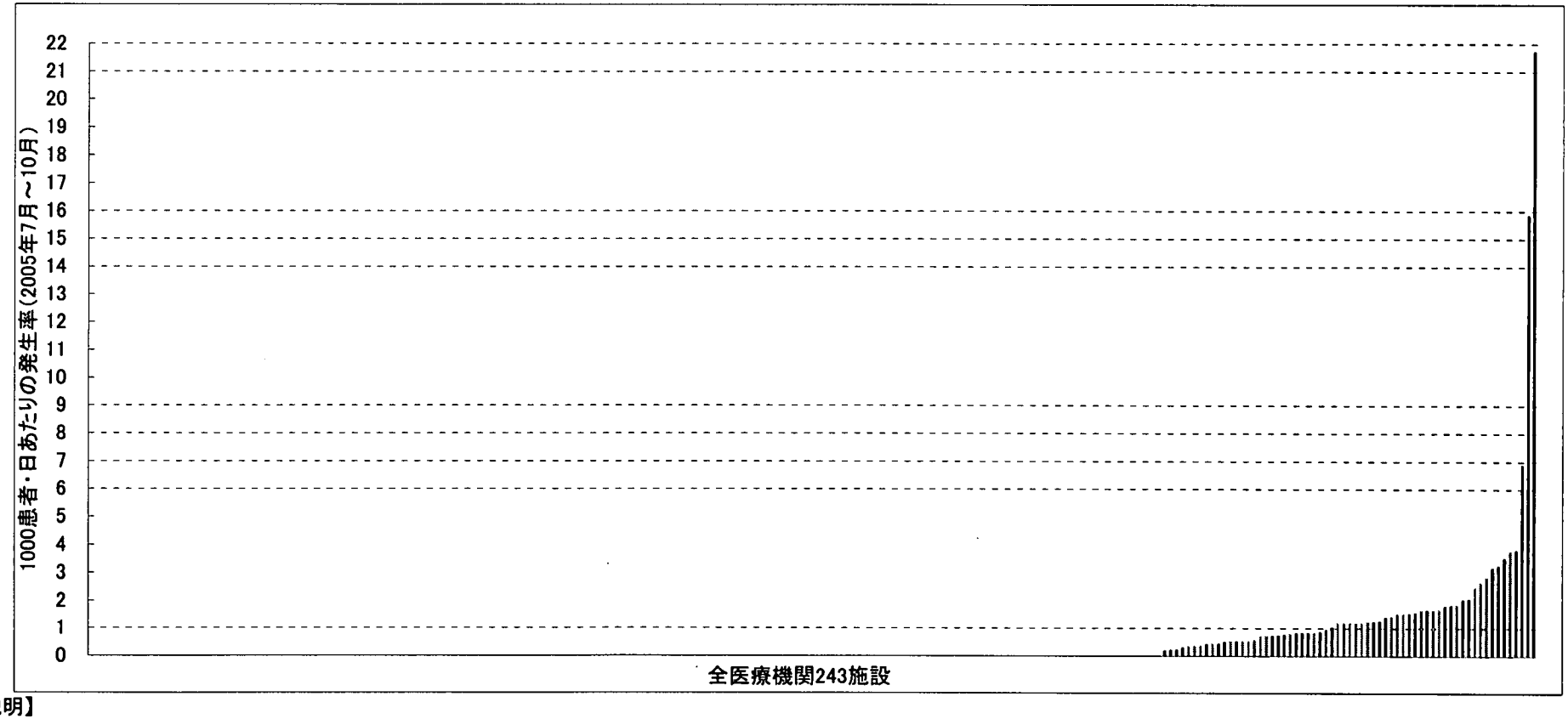
:入院後に発症した敗血症(乳児)　:入院後に発症した敗血症(1～14歳)　:入院後に発症した敗血症(15歳以上)

【コメント】

・入院後に発症した敗血症の症例数1例以上の医療機関(243施設中241施設)。「入院後合併症」が『敗血症』であり、かつ「入院時併存症」と「入院の契機となった傷病名」のいずれも『敗血症』でない症例を選択した。入院後に敗血症を合併した症例のうち、「最も医療資源を投入した傷病名」が「敗血症」として分類されていた症例数は、乳児で4.4%、1～14歳で4.2%、成人で4.1%であった。

入院後に発症した敗血症の発生率(乳児)(N = 136)

分類名	対象	平均値	標準偏差	最小値	最大値	パーセンタイル 5	10	25	50	75	90	95
入院後に発症した敗血症(乳児)	入院後に発症した敗血症の発生率(乳児)〔全施設〕	0.60	2.04	0.00	21.74	0.00	0.00	0.00	0.00	0.54	1.59	2.42
	入院後に発症した敗血症の発生率(乳児)〔特定機能病院〕	0.20	0.56	0.00	3.81	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.79	1.54
	入院後に発症した敗血症の発生率(乳児)〔その他の参加病院〕	0.41	2.00	0.00	21.74	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.82	1.81



【図の説明】

発生率を1000患者・日あたりで示す

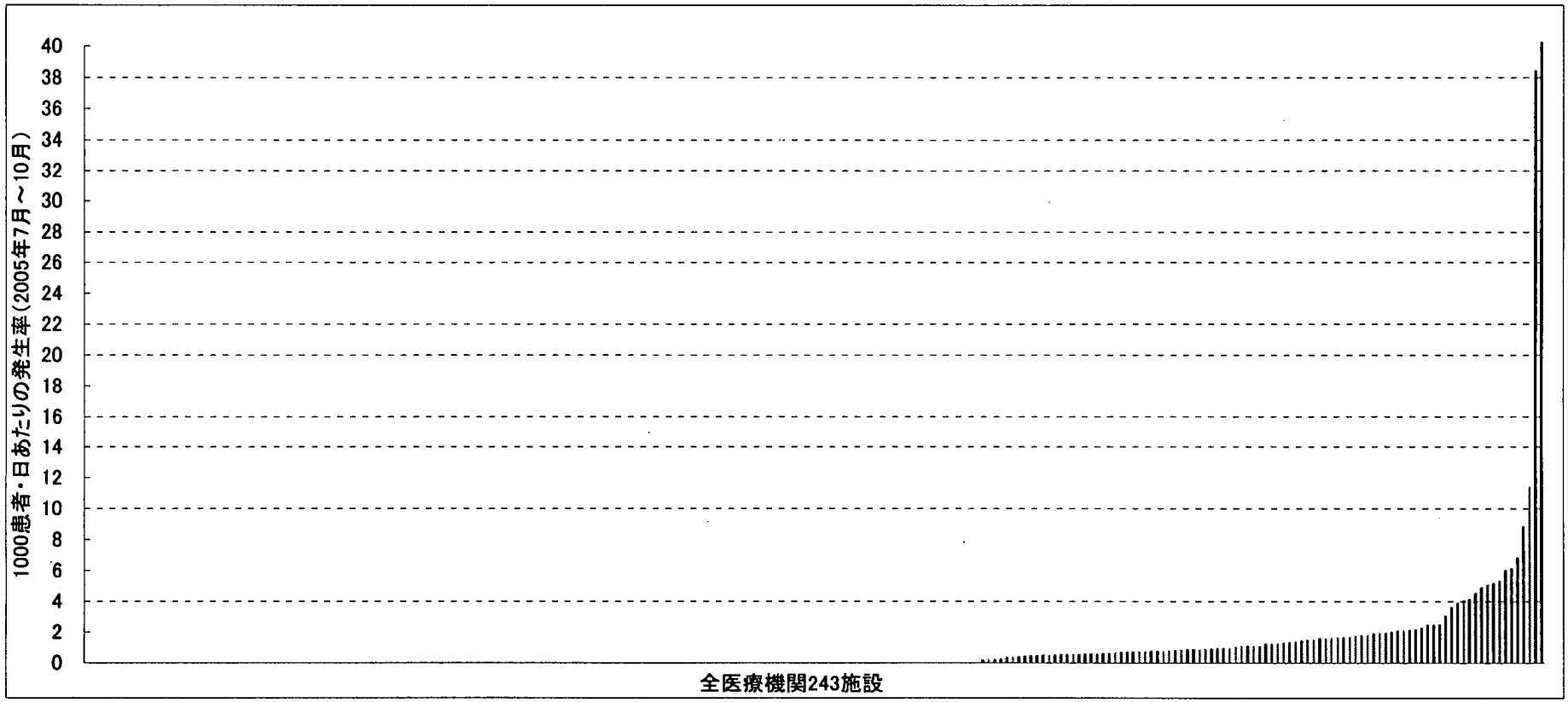
:特定機能病院　　:その他の参加病院

【コメント】

・乳児の入院後に発症した敗血症の発生率は、特定機能病院よりもその他の参加病院で高い傾向があった。

入院後に発症した敗血症の発生率(1～14歳)(N = 353)

分類名	対象	平均値	標準偏差	最小値	最大値	パーセンタイル 5	10	25	50	75	90	95
入院後に発症した敗血症(1～14歳)	入院後に発症した敗血症の発生率(1～14歳)〔全施設〕	2.24	21.56	0.00	333.33	0.00	0.00	0.00	0.00	0.86	2.12	4.16
	入院後に発症した敗血症の発生率(1～14歳)〔特定機能病院〕	0.28	1.00	0.00	11.43	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.98	1.65
	入院後に発症した敗血症の発生率(1～14歳)〔その他の参加病院〕	1.96	21.56	0.00	333.33	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.46	3.07



【図の説明】

発生率を1000患者・日あたりで示す

:特定機能病院　　:その他の参加病院

【コメント】

・半数以上の病院において、1～14歳の入院後に発症した敗血症の発生がなかったが、この原因として①医療機関により患者特性に違いがある、②入院後合併症の入力に施設内で違いがあることが考えられる。なお、1施設において1000患者・日あたり333であったが、図には表示していない。